

第二節 承久の乱後の鈴鹿郡

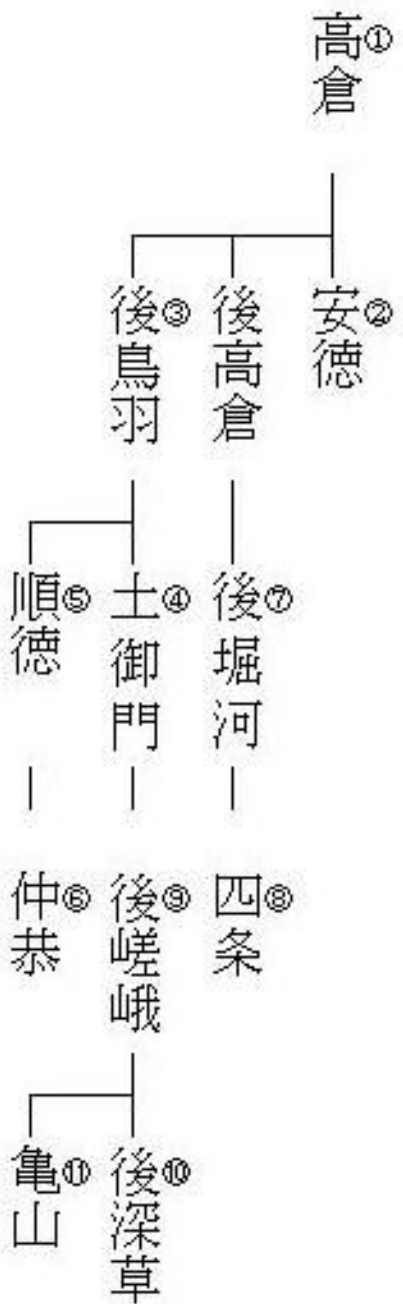
第一項 承久の乱と鈴鹿郡

承久の乱 建久九年（一一九八）正月、後鳥羽天皇は、皇子為仁親王（土御門天皇）に譲位。承元四年（一二一〇）十一月には、土御門の弟守成親王（順徳天皇）に譲位させる。六勝寺領・蓮華王院領・新日吉社領・新熊野社領・最勝光院領といった、名だたる皇室領を祖父後白河院から一手にうけついで後鳥羽は、専制君主の道を歩んでいく（図60）。

一方で、後鳥羽院は、その当初、鎌倉幕府とも良好な関係を築いていた。建仁三年（一二〇三）九月、二代將軍源頼家が失脚した際、頼家の弟千幡を征夷大將軍に任じ、元服させ、実朝という諱を授けたのは、ほかならぬ後鳥羽であった。そして、元久元年（一二〇四）十月、実朝は、後鳥羽の側近坊門信清の娘を妻に迎え、承元三年（一二〇九）四月に非参議従三位、建保四年（一二一六）六月に権中納言、建保六年十二月に右大臣と、破格の昇進を遂げる。

ところが、建保七年（一二一九）正月、源実朝は、右大臣昇進の拝賀に訪れた鶴岡八幡宮で、甥の公暁に殺害される。実朝の母北条政子は、後鳥羽の皇子のいずれかを四代將軍として下されるよう、かねてから要望していた。だが、後鳥羽の拒

図60 鎌倉時代前期天皇家略系図 数字は即位順



絶と実朝の急死で、皇族將軍の東下は頓挫する。公武の関係は、一氣に冷え込んだ。

そして、承久三年（一二二二）五月、ついに後鳥羽院は、幕府の執権北条義時の追討を命じる官宣旨を下す。親幕府派の大納言西園寺公経は幽閉され、鎌倉から派遣されていた京都守護のおおえのちかひろの大江親広は、京都方に味方した。もう一人の京都守護伊賀光季は、京都方に攻められ、邸に火を放って自殺した。

幕府の御家人も、多く京都方に参陣した。摂津・伊賀・伊勢・美濃・越前国の守護を兼ねる大内惟信、近江・石見・隠岐・ながとのくに長門国守護の佐々木広綱、淡路・阿波国守護の佐々木経高、播磨のくに磨国守護の後藤基清、安芸国守護の宗孝親、但馬国守護の安達親長らである。この時期、在京していた御家人らは、幕府に属する一方で、院や朝廷の指令を直接にうけて活動する両属的な存在であった。『承久記』は、京都方の軍勢を千七百騎と記す。

対して、鎌倉から攻めのぼる幕府軍は、三手に分かれた。『吾妻鏡』によれば、第一軍の東海道大將軍は、北条時房・泰時ら。軍勢は十万余騎。第二軍の東山道は、武田信光・小笠原長清らの五万余騎。第三軍の北陸道は、北条朝時・結城朝広らの四万余騎。数に誇張はあれ、戦力差は歴然だった。

六月六日、幕府の東海道軍は摩免戸（岐阜県各務原市前渡）・洲俣（同県大垣市墨俣町）、勢多（滋賀県大津市瀬田）・宇治（京都府宇治市）などで京都方の軍勢を撃破し、六月十五日、入洛する。結果、後鳥羽は隠岐国（島根県）、順徳は佐渡国（新潟県）に配流される。そして、乱と無関係の土御門も、みずから希望して土佐国（高知県）、のち阿波国（徳島県）に流されるのである。

後院領の村々 承久の乱後の承久三年（一二二二）七月、幕府の要請で、後鳥羽院の兄守貞親王（後高倉院）の皇子茂仁（後堀河天皇）が即位し、後高倉院が院政を開始する。天皇在位経験の

ない人物による院政は、未曾有のできごとである。そして、幕府は、後鳥羽院の有した膨大な荘園群をいったん没収するも、後高倉院に返還する。とはいえ、後鳥羽院の旧領すべてが、後高倉院に返されたわけではなかったようである。

乱にさきだつ承久三年（一二二一）三月、北条政子は、ある日の明け方、夢をみた。——二丈（約六m）ほどの鏡に、鎌倉の由比が浜の白波が映っている。鏡から声がする。「吾は、これ（伊勢）大神宮なり。天下を鑑みるに、世、大いに濫れて兵を徴すべし。（北条）泰時、吾を瑩さば、太平を得ん」（『吾妻鏡』同月二十二日条）。

乱後の八月、北条政子は、ふと伊勢神宮の夢を思い出す。何と、あの夢はまさしく、いまの世上と符合しているではないか。政子は、後鳥羽院から没収した後院領（天皇退位後の御所に附属する所領）のなかから、安楽村（安坂山町）・井後村（井尻町）を伊勢内宮に、葉若村（羽若町）・西園村（比定地不明）を伊勢外宮に寄進する（史456）。

これらの村々は、かつて保元元年（一一五六）七月の乱で崇徳院方として没落した、平忠正（清盛の叔父）の散在所領であった（第五章第二節第二項を参照）。乱後に没収された散在所領は、乱の勝者たる後白河天皇の後院領に編入され、さらに、文治三年（一一八七）三月の史料に「後院御庄内」の葉若村・井後村・平野村（鈴鹿市平野町）・上野村（鈴鹿市上野町）・久吉名（比定地不明）・河曲村（比定地不明）・安楽村としてあらわれる（史416）。

その後、後院領は後白河院から後鳥羽院に伝えられ、こたびの没収へといたる。そのうちの葉若・井後・安楽・西園村が、今回、伊勢神宮に寄進されたのである。他方、承久の乱後、幕府は、平野村を京都の賀茂別雷（上賀茂）社（京都市北区）に寄進する。以後、平野村は、平野荘とよばれるようになる（史454）。

承久の乱の余波 承久の乱の影響は、後鳥羽院旧領の没収と返還のみにとどまらない。前述のごとく、乱の京都方には、後鳥羽院の近臣とともに、畿内近国の守護が多く参加していた。これら守護のもとには、各国の国御家人も多く動員されており、結果、彼らの所領は、謀反人の所領として没収されることになる。一説にその数、三千カ所以上に及んだという（史456）。

乱当時の伊勢国守護は、大内惟信。おおいどのわたり大井戸渡（岐阜県可児市土田）で、幕府軍に敗れて逃亡した（『吾妻鏡』承久三年六月五日条）。伊勢国御家人のなかにも、惟信に率いられて京都方に参加した者がいた可能性もあるが、史料は残らない。

とはいえ、二度の伊勢・伊賀平氏の乱で、すでに当国生え抜きの武士は、壊滅的状况にあり、このころ伊勢国に勢力を扶植していたのは、おもに東国からの新入勢力であった。あわじのくに淡路国（兵庫県の場合、守護佐々木経高に率いられて京都方に動員され、乱後、生え抜きの国御家人のほとんどが没落した。生え抜きの国御家人の少ない伊勢国の場合には、淡路国ほどの影響はなかったのではないかと憶測する。

乱後、伊勢国守護に補任されたのは、六波羅探題みなみかた南方に着任した北条時房ときさかである。その際、時房は、まがりのみくりや勾御厨（松阪市曲町）・丹生山にうやま（多気郡多気町丹生）・南堀江永恒みなみほりえながつね（鈴鹿市南堀江）・黒田御厨くろだみくりや（比定地不明）など、一六カ所の所領を拝領している。いずれも、京都方の旧領であろう。大内惟信の旧領もふくまれているかもしれない。

嘉禄二年（一二二六）七月、北条時房は、承久の乱の勢多合戦で勲功を挙げながら、いまだ恩賞を預かっていない橘公たちばなのきん高・本間忠貞ほんまたださだ・小河左衛門尉おがわさえもんのじよう・同右衛門尉うえもんのじように対し、自分が伊勢国で拝領した一六カ所の所領から四カ所を割いて、その賞に充てたという（『吾妻鏡』同月一日条）。いずれも、時房の被官ひかん（家人）である。

嘉禄三年（一二二七）四く七月には、守護代本間元忠もとただが、丹

生山で蜂起した悪党の追捕を試みている。このほか、伊勢国守護代としては、天福二年（一二三四）正月のいちのいえしげ一野家重（『鎌倉遺文』四六〇二号）、寛喜三年（一二三二）十月と嘉禎四年（一二三八）九月の本間忠家ただいえが知られる（史469、ならびに「国立公文書館所蔵光明寺古文書」巻七）。いずれも北条時房の代官である。おそらく時房は、没する延応二年（一二四〇）正月まで守護の任にあり、その地位は、しばらく時房の子孫たる大仏流にうけつがれたものとみられる。

第二項 モンゴル襲来と鎌倉幕府の滅亡

両統迭立の始まり 承久の乱ののちに開始された後高倉院政は、貞応二年（一二二三）五月、院が没することで終わりを告げ、皇子後堀河天皇の親政が始まる。だが、貞永元年（一二三二）十月、後堀河は皇子秀仁親王みつひと（四条天皇）に譲位して院政を開始するも、天福二年（一二三四）八月、死去する。四条天皇は、まだ四歳であった。

そして、仁治三年（一二四二）正月、一二歳の四条天皇が突然死する。当然、皇子はいない。朝廷内には、順徳院の皇子忠成ただなり王を推す勢力もあったが、承久の乱を首謀し、まだ佐渡国に健在だった順徳の皇子が即位するのを、鎌倉幕府は嫌った。

結局、幕府の後押しで皇位についたのは、土御門院の皇子邦仁くにひと王（後嵯峨天皇）であった。土御門院は、乱とは無関係ながら阿波国に流され、すでに没していた。しかも邦仁は、すでに二三歳ながら、親王の号も与えられず、元服さえしていない。本人も予期せぬ後嵯峨の即位が、こののち百五十年以上も続くりようとうてつりつ両統迭立と南北朝内乱の遠因となろうとは、当時、誰が予想しただろうか。

これにさきだつ延応元年（一二三九）二月、後鳥羽院が隠岐

国で没した。そして、延応二年正月に幕府の連署北条時房、仁治三年（一二四二）六月に執権北条泰時が死去する。さらに、同年九月には、自分の皇子が皇位に即けなかったのを見届けるかのごとく、順徳院が佐渡国で没した。世人は、相つぐ要人の死を、後鳥羽院の怨霊の所為と噂した。

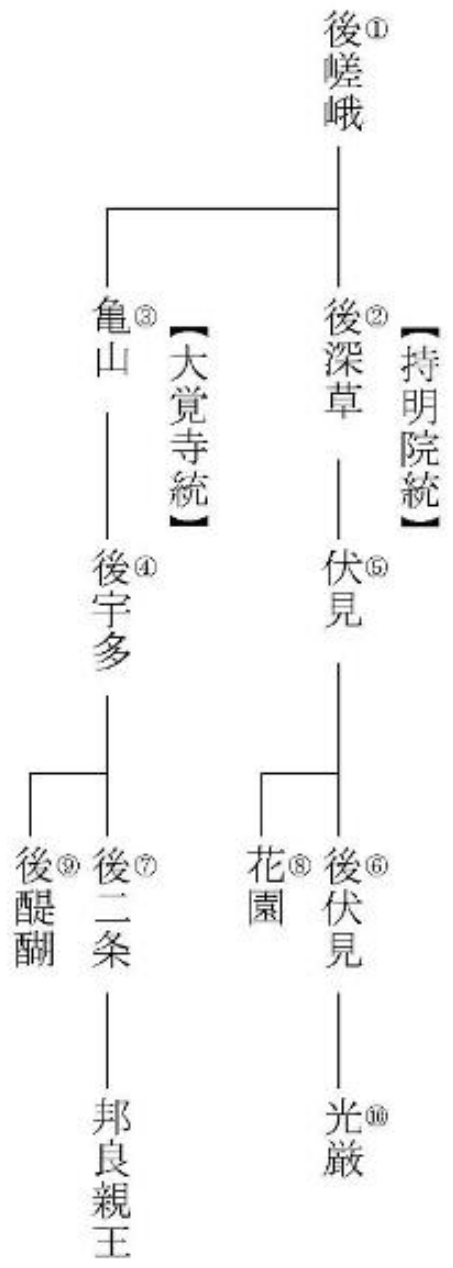
寛元四年（一二四六）正月、後嵯峨は長子久仁親王（後深草天皇）に譲位し、院政を開始する。ところが、建長元年（一二四九）五月に次子恒仁親王が誕生すると、正嘉二年（一二五八）八月、後嵯峨は恒仁を皇太子にすえ、正元元年（一二五九）十一月、即位させる。龜山天皇である。そして、文永四年（一二六七）十二月、龜山に皇子世仁親王（後宇多天皇）が生まれ、文永五年八月、世仁は皇太子に立つ。

そうしたなか、文永九年（一二七二）二月、後嵯峨院が没する。後嵯峨の皇子である後深草・龜山兄弟のうち、いずれが後継者となるかが問題となり、後嵯峨院の遺言（と称する兄弟の母大宮院藤原媞子の意向）で、弟の龜山が後継となる。

兄である後深草の不満は、当然だった。文永十一年正月、後宇多天皇が即位して龜山院の院政が始まると、後深草は、上皇の号を返上して出家する意思をみせ、幕府へ愁訴する。その結果、建治元年（一二七五）十一月、幕府の奏請により、後深草院の皇子熙仁親王（伏見天皇）が皇太子となるのである。

これにより、のち約五十年間、後深草を祖とする持明院統

図61 鎌倉時代後期天皇家略系図 数字は即位順



と、亀山を祖とする大覚寺統が皇位を争奪する両統迭立の時
代が続き、鎌倉幕府滅亡の一因ともなる。さらにのち、両者は
それぞれ北朝・南朝となり、二つの王朝の存在は、列島全体
を戦乱に巻きこんでいくのである(図61)。

モンゴル襲来の影響 両統迭立とともに、鎌倉時代史を語るう
えで欠かせないのが、文永十一年(一二七四)十月と弘安四年
(一二八二)五月、二度にわたるモンゴル帝国軍の襲来である。
モンゴル帝国は、皇帝クビライ(フビライ)が東アジアを直接
統治し、一族が中央アジアから西北ユーラシア・西アジアにか
けて、すなわちユーラシア大陸の過半を分割統治する世界帝国
であった。鎌倉幕府の御家人をはじめとする日本側の軍勢は、
二度の襲来をかりうじて撃退する。

モンゴル軍の襲来とそれへの対応は、鎌倉幕府の列島支配の
ありかたにも、大きな影響を与えた。初度の襲来の翌年にあた
る建治元年(一二七五)の末、鎌倉幕府は、九州方面を中心と
する少なくとも一カ国以上の守護を改替し、守護本人や子弟
などの名代を「異賊征罰の大將軍」として各国に派遣する。

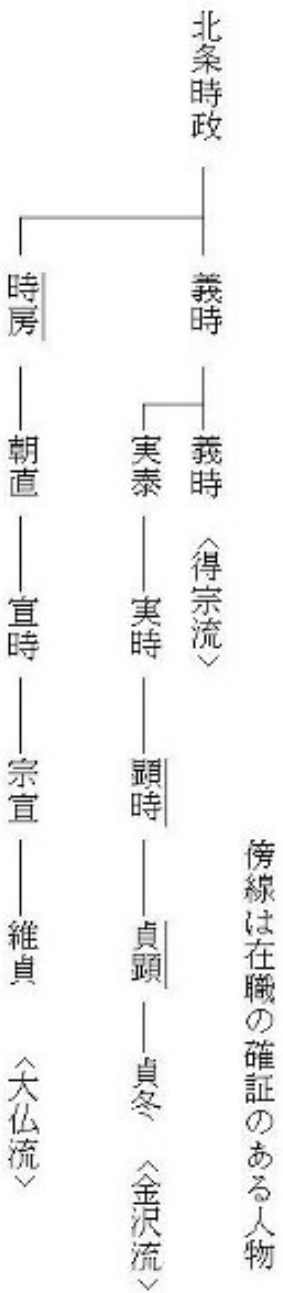
その実、これらは、モンゴル軍の列島攻撃に協力した朝鮮半
島の王朝高麗へ出兵するための軍事司令官にほかならぬ。そし
て、高麗出兵は、まもなく中止されるものの、以後、とくに再
度の襲来に備える九州方面の諸国で、それまでほとんど在国す
ることのなかった守護本人や名代が、現地に常駐するようにな
る。結果、東国では鎌倉(神奈川県鎌倉市)、畿内近国では京
都の六波羅(京都市東山区)、九州では筑前国の博多(福岡市
博多区)を核とする、鎌倉幕府による地域支配の分極化が進む
のである。

前述のごとく、伊勢国では、おそらく北条時房が延応二年(一
二四〇)正月に没するまで守護の任にあり、その地位は、しば
らく時房の子孫である大仏流に伝えられたものとみられる。し
かし、文永元年(一二六四)五月、時房の嫡男朝直が没し、弘

安元年（一二七八）十二月には、守護代として鵜沼国景うぬまくにかげの名前がみえる（『鎌倉遺文』一三三三三五号）。鵜沼氏は、北条氏金沢流かねざわの顕時あきときの被官（家人）であった。この間、伊勢国守護の地位は、大仏流から金沢流の手に移ったのである。

守護が交替した時期は不明ながら、前述した建治元年末の段階で、顕時の父実時さねときは、執権北条時宗ときむねを支える幕府の重鎮としての地位にあり、新たに豊前国ぶぜんのかくに（福岡・大分県）の守護にも任じられている。伊勢国守護への就任も、同時期だった可能性が高い（図62）。

図62 伊勢国守護関係系図 傍線は在職の確証のある人物



傍線は在職の確証のある人物

鎌倉幕府の滅亡 一方、そののち朝廷では、持明院統の伏見・後伏見天皇ごふしのみののち、正安三年（一三〇一）正月、大覚寺統の後二条天皇にじようが即位。皇太子には、持明院統の富仁親王とみひと（花園天皇はなぞの）が立つ。ところが、徳治三年（一三〇八）八月、後二条天皇が二四歳の若さで没する。結果、花園天皇が即位し、皇太子となったのは後二条の弟尊治親王たかはる（後醍醐天皇ごだいご）であった。

そして、文保二年（一二二八）二月、後醍醐天皇は即位する。とはいえ、皇太子に立ったのは、甥の邦良親王くになが。後醍醐は、大覚寺統嫡流の邦良が即位するまでの中継ぎ天皇にすぎず、いったん皇位を手放せば、後醍醐の皇子に皇位が廻ってくる可能性は、きわめて低い。承久の乱以後、皇位継承の最終決定権を握っていたのは、鎌倉幕府であった。

果たして元亨四年（一二二四）九月、後醍醐の第一次倒幕計画が発覚し、後醍醐の立場は、いよいよ悪化する（正中の変）。そして、正中三年（一二二六）三月、皇太子邦良が二七歳で没するも、かわって皇太子に立ったのは、持明院統の量仁親王かずひと

(光厳天皇)であつた。かくて鎌倉幕府が存続する以上、後醍醐の子孫が皇位を継ぐ可能性は、ほぼ完全に消滅したのである。そして、元徳三年(一三三一)四月、後醍醐の第二次倒幕計画が発覚。同年八月、後醍醐は山城国笠置山(京都府相楽郡笠置町)に立て籠もり、幕府の大軍を迎え撃つも、九月に身柄を拘束される(元弘の変)。

このとき、幕府軍の伊勢国御家人を率いたのは、伊勢国守護北条貞顕の子息貞冬。近江国柏木(滋賀県甲賀市水口町)から山城国宇治(京都府宇治市)、同国賀茂(同府木津川市加茂町)を経て笠置山に進軍したという(『光明寺残篇』)。伊勢国御家人の構成や規模は不明ながら、同国御家人の多くは、この段階では幕府方に属していたものとみられる。

その一方で、元弘元年・元徳三年(一三三一)九月、後醍醐の内意をえた楠木正成が、河内国の赤坂城(大阪府南河内郡千早赤坂村)で挙兵。幕府軍が四手に分かれて攻め向かうなか、伊勢国御家人を率いる北条貞冬は、石清水八幡宮(京都府八幡市)から佐々良(讚良)路(大阪府・奈良県境の生駒山系の西側)を南下した(『光明寺残篇』)。そして、同年十月、赤坂城はいったん落城する。後醍醐も、元弘二年・正慶元年(一三三二)三月、隠岐国(島根県)へ流される。

だが、元弘二年・正慶元年六月、後醍醐の皇子護良親王の命をうけた竹原八郎入道の軍勢が、紀伊国熊野山から伊勢国を襲撃。地頭二、三人を討ち取り、守護代の宿所を焼き払う事件がおこる(『花園天皇宸記』同月二十六・二十八・二十九日条)。そして、同年の末、楠木正成が再び挙兵。河内国の千早・赤坂城に籠もり、幕府の大軍を引きうけ、千早城は幕府滅亡まで持ちこたえるのである。

さらに、年明けた元弘三年・正慶二年正月、赤松円心が播磨国(兵庫県)で蜂起する。同年閏二月には、後醍醐も隠岐国を脱出。後醍醐を迎えた名和長年の軍は、伯耆国船上山(鳥取県

東伯郡琴浦町赤碕）で、隠岐国守護の佐々木清高を破る。内乱は、西国の各地に拡大した。

そして、元弘三年・正慶二年五月、幕府軍の大將軍足利高氏あしかがたかうじ（尊氏たかうじ）が離叛して、京都の六波羅は陥落。持明院統の上皇・天皇を奉じて東国への脱出を試みた六波羅探題の軍は、近江国の蓮華寺れんげじ（滋賀県米原市番場）で滅亡する。『太平記』によれば、このとき鈴鹿川近辺の山賊・強盗が、探題らを迎撃した軍にふくまれていたという（史548）。

また、足利高氏は離叛ののち、吉見円忠よしみえんちゆうに対して「伊勢国凶徒」の退治を命令。これをうけ円忠は、同国三重郡の御家人に対し、小河（比定地不明）への参集をよびかけている（史549・550）。内乱が展開するとともに、伊勢国御家人の幕府からの離叛も、徐々に進んでいたであろう。

そして、同じ月、鎌倉に新田義貞軍にったよしさだが突入。鎌倉幕府は、滅亡するのである。